

古代史の散策を楽しむ

Part.VIII

歴史人口学から日本人の起源に迫る！

NCJ100日本とユダヤの
ハーモニーから続く

日本の古代史を散策していると、いつか必ず通るのが「日本人の起源」に関わる奥の細道です。昨今の学説によると、日本人の起源は60万年以上前の更新世まで遡り、100万年前のジャワ原人、80万年前の北京原人の流れに続くと考えられています。そして3～4万年前頃から中央アジアや東中国、南中国に現れたアジア最古のホモ・サピエンスと呼ばれる新人が日本列島に到来し、原日本人となったという仮説が登場しました。

既に1万8000年前の旧石器時代の人骨も沖縄で見つかり、その後の調査から東南アジアや南方諸島、中国南方で発掘されたものとの関連性が指摘され、信憑性は深まります。そしてアジア大陸からはヒマラヤ山岳民が、中国や朝鮮半島からは渡来系弥生人も訪れ、日本固有の文化を生み出していきます。日本人の祖先とは、異なるルーツの人種が日本列島において共存し、関わり合った結果として誕生した背景が、おぼろげながら浮かびあがってきます。

国立科学博物館による最新の研究

国立科学博物館を主体とした研究チームが中心となり、昨今の遺伝子工学や人骨の発掘調査を参考に、「日本人の起源」について、これまでの通説を見なおすことを目指した取り組みが5年間にわたって行われ、2010年に新たな仮説が発表されました。これまでは、沖縄で発見された港川人が縄文人の祖先ではないかと考えられてきました。ところが再検証をしていく内に、港川人は東南アジアのルーツというよりは、更に南のオーストラリア先住民やニューギニアの集団に近いことが分かってきました。その結果、港川人の多くは、大陸から移住してくる農耕民の広がりによって、南方に移動せざるをえなかった民ではないかという新たな仮説が登場しました。しかも、北海道で発掘された縄文時代から続縄文時代の人骨の遺伝子を分析していく内に、大陸北東部のアムール川下流に住む先住民と関連している事実が指摘され始めたの

です。つまり、これまでの通説であった縄文人のルーツは南方諸島から、という考えは不十分であり、大陸北東部からも渡来していることを考慮する必要性が判明したのです。

最終的な日本人形成のシナリオとして研究チームによって発表された内容は、ホモ・サピエンスに進化した人類の一部が東南アジアに到着し、北上して日本列島に拡散し、縄文人の祖先になる者も存在したが、その民の流れとは別に、アジア大陸の北方から移住した民も含まれていたのではないかとことです。そして大陸では、寒冷地に適応した集団が東進南下して3000年前程までに中国や朝鮮に住み始め、最終的には縄文時代の終わりから弥生時代にかけて西日本に渡り、縄文人と融合しながら、弥生時代以降の本土における日本人の祖先になったという仮説に至ったのです。

この国立科学博物館が発表した日本人の起源に関する新しい仮説は、実際には学者の見識がまとまらない論点も多く、結果として通説を否定するまでには至らず、およその妥協点としての発表であり、いかに「日本人の起源」を語ることが難しいかを物語っています。

そこでこの説を後述する「歴史人口学」のデータを基に検証すると、縄文時代における人口分布が著しく東日本に偏り、九州、四国には殆ど人が居住していなかったことからしても、南方から北上した人数は限られており、むしろ、暖かく住みやすい土地を探し求めた北方からの民が、東日本の平野部から中部にかけて居住範囲を広げていったと考える方が、人口分布に関するデータとのつじつまが合いそうです。

しかし、今回の研究班の報告については、いくつか疑問点があり、それらを踏まえて考える必要があります。まず、年代別の人口の推移を十分に考慮しておらず、弥生初期から特に後期にかけて、人口が激増した理由について説明がないこと。次にシベリアで寒冷地に適応した集団が東進南下したと想定してい

るが、なぜ南下だけではなく東進しなければならなかったのか、その背景が解明されていないこと。そして、シベリアからの移民が3000年前までに中国や朝鮮などに分布したとするならば、なぜ古代文明の発祥地でもあるアジア大陸を後にして、わざわざ日本に渡らなければならなかったのか。また、南方から北上してきた人々と、シベリアから南下した人々が原日本人の起源であり、弥生人の大半が中国から訪れたとするならば、なぜ日本語はそれらの人々とはおよそ関係のない、西アジアから北アジア大陸にかけて普及した、モンゴル語や朝鮮語と同じアルタイ諸語の仲間と分類されているのか、それらの説明に欠けること等が挙げられます。

いずれにせよ、この度の研究成果の発表により、少なくとも縄文人とはいくつかのルーツを経た様々な集団が関わって誕生した人種であることが明確になりました。それに加え、上記の疑問点を踏まえて考えることで、日本の歴史の謎を紐解くキーポイントが見えてきます。「日本人の起源」を考察する上で、弥生時代の人口増加の実態を含む様々な疑問点を解明するには、イスラエルからの大量移民の可能性に目を向ける以外に、歴史の謎を紐解く術はないようです。

歴史人口学が明かす縄文時代の人口

過去の人口現象を考察する学問を「歴史人口学」と呼んでいます。例えば紀元前3世紀の日本の人口を推測する際、以前は北アメリカの先住民に関する人口データから様々な類似点を探り、日本の事例に当てはめながら15万人から25万人の人口であると推定するような方法がとられました。「歴史人口学」ではそれに加えて、遺跡の分布や、基礎人口、集落規模等までも検証し数字の精度を高めています。その「歴史人口学」の研究結果から、日本列島における人口分布の実態が見えてきました。研究の結果、縄文時代の初期にあたる紀元前6000年頃、およそ2万人の原日本人の大半が東北から関東、東山（山梨・長野地域）にかけて

居住していたと推定されました。つまり縄文時代は人口分布が東日本側に著しく偏り、西日本では縄文晩期まで、ごく僅かな人口しか居住していなかったようです。そして日本の人口は、紀元前3200年頃に約10万人、縄文中期の紀元前2300年頃にはおよそ25万人まで増加するも、総人口の96%までもが東日本に居住していたと推定されました。東日本に人口が集中した経緯は、ごく一般的に、東日本の方が平野部も多く、採取、狩猟、漁撈活動が行いやすいという食料資源に関連する事柄が主たる理由であったと考えられています。

歴史の転換点となる弥生時代

弥生時代の始まりについては様々な議論がありますが、水稻や製鉄の文化が導入された頃と位置付けるならば、およそ紀元前10世紀頃がその始まりと考えて良いでしょう。ちょうどその頃、イスラエルではソロモン王が君臨し、タルシシュ船を利用して諸外国との貿易が行われていました。そのタルシシュ船が日本とも接点を持ち、関東、東北地方の太平洋沿岸、及び北九州地方等に辿り着いた可能性が考えられます。優れた大陸文化を携えたタルシシュ船は、日本に製鉄や水稻文化、様々な大陸文化を日本に紹介したのではないのでしょうか。近年の放射性炭素年代測定により、水稻の年代が紀元前10世紀まで遡ることが分かってきたことからしても、弥生初期が日本史の大きな転換点であったに違いないでしょう。

弥生時代の急激な人口増加を検証

歴史人口学の研究によると、弥生初期、紀元前10世紀頃の人口はおよそ7万6000人前後と推定されていますが、注目すべきはそれが紀元3世紀に入ると、60万人に膨れ上がる点です。縄文時代における平均的な人口増加率は0.1%と推定され、その値が弥生時代も変わらないと仮定するならば、紀元3世紀の人口は23万人程度になるはずですが、ところが推定人口はそれより37万人も多く、2.5倍以上の開きがあり、人口の年平均増加率もそれに連れて、0.2%に急上昇しています。

その要因については、これまでアジア大陸の歴史の流れに照らし合わせ、中国の春秋時代に

起った内乱で土地を追われた民が海を渡り始めたからではないか、という説明がされていました。しかし、この説にはいくつかの問題点があります。まずは春秋時代における中国の地理的条件と人口分布を考慮していないことです。

およそ紀元前8世紀から中国では春秋時代が始まり、その後、晋は韓、魏、趙の3国に分かれます。当時、中国では内陸の西安を中心として人口が分布し、太平洋沿岸周辺では、大きな都市が発展するまでに至っていませんでした。よって戦火を逃れるにしても、わざわざ大陸を何百キロも旅して、更に海まで渡り、中国から大勢の難民が日本列島に渡来したとは考え難いのです。また、春秋時代から戦国時代にかけて中国より大勢の難民が渡来したことにより、紀元3世紀までに日本の人口が37万人も増加したとするならば、渡来人が与える文化的影響は計り知れないはずですが、例えば、日本語の文化は中国語の影響を強く受けてしかるべきでしょう。しかし日本語は、西アジアから北アジア地域に広まったアルタイ諸語のひとつと分類され、朝鮮語やモンゴル語に類似するも、中国語とは一線を引いた言語グループに含まれています。このことから、弥生時代に中国から難民が日本に渡ったという説では、37万人にも上る人口の差異を説明することができません。

弥生人の正体はイスラエルか！

紀元前10世紀から紀元3世紀にかけて、日本の人口が急激に増加した理由は、アジア大陸からイスラエル人が渡来してきたからに他ならず、今日でも日本文化の根底にはイスラエル文化の影響が色濃く残っています。紀元前8世紀頃のイスラエルの人口は、北イスラエル王国と南ユダ王国を合わせると、最低でも70万人から100万人以上に達していたようです。旧約聖書には20歳以上の北イスラエル王国の戦士が80万人から110万人、南ユダ王国には50万人登録されていたという人口調査の結果報告が記載されており、また紀元前13世紀まで遡る出エジプト記や民数記の記述でも、20歳以上の男子の数が当時、60万人以上も登録されていたことが明記されています。よって紀元前8

(裏面に続く)

世紀の全人口は膨大な数になっていた可能性があります。しかし人口も2～300万人を超えてきますと、人口密度の観点からしてその数字は非現実的であるという見解もあり、紀元前8世紀の人口は、北イスラエル王国が50～100万人、南ユダ王国が25～50万人、というおよそ少なめの人口を想定してみました。

その北イスラエル王国が崩壊し、南ユダ王国の滅亡も間近であった紀元前7～8世紀、まず、北イスラエル王国の10部族がアジア大陸各地に離散し、消息を絶ちました。その後、南ユダ王国も壊滅し、ごく一握りの民が捕囚としてバビロンに連れていかれます。その数はエレミヤ書によると4600人、列王記下には高官も含めて1万人と記載されており、決して多い数ではありません。つまり、北イスラエル王国だけでなく、ユダ族とベニヤミン族、そしてレビ族からなる南ユダ王国の民の多くも、歴史から姿を消してしまったのです。中には大陸を横断して海を渡り、日本列島まで辿りついたイスラエルの民も存在したのではないのでしょうか。大規模な民族移動となれば、殆どの民は大陸を徒歩で横断したと考えられ、これらイスラエル難民の残した歴史の軌跡が、シルクロードの原点となりました。

また、当時のイスラエルは航海技術も発達しており、ソロモン王の時代からタルシシュ船によるインド洋への航海実績もあることから、王族を始めとする少数の南ユダ王国の民は、聖櫃、その他、神宝を携えた船で先行し、日本まで旅した可能性があります。実際問題として、南ユダ王国の民にとっては王位を継承し、神宝を守護することは民族の死活問題でした。よって「東の島々」を探し求め、そこを安住の地とすることは民族の強い願望でもあったはずです。こうして弥生初期より北イスラエル王国の民を含む、大勢の南ユダ王

国の民が日本に渡来してきたのでしょう。そして一部先行してイスラエルを旅立った預言者の船団は、東南アジアの南方から北上し、沖縄経由で四国、九州に辿り着き、その他大勢の人々は、ひたすらアジア大陸を東へと向かい、日本に辿り着いたと考えられます。

そこで、まず5万人のイスラエル民族が紀元前8世紀頃、日本列島に辿り着いたと想定してみました。その後、紀元3世紀までの1000年間、100年毎に2万人ずつ、合計23万人が渡来したと仮定し、平均人口増加率0.1%を当てはめると、紀元3世紀には渡来人の人口が37万人となり、元来日本列島に居住していた縄文人と合わせれば、日本の人口が60万人になります。後世の奈良時代から平安末期の年間増加率が0.1%、そして平安初期から平安後期の年間増加率が0.07%であることからしても、0.1%の人口増加率はおおよそ妥当と考えられます。弥生時代前半に20万人を超える渡来人が何者であったかを考えると、その膨大な人口と歴史的背景、動機などから察するに、もはやイスラエル民族以外に答えはないでしょう。

100万人渡来説は本当？

最近の歴史人口学のデータによると、紀元3世紀に60万人まで増加した日本の人口は、奈良時代にかけて更に加速し、紀元8世紀には450万人まで膨れ上がったようです。年平均の人口増加率を求めると、およそ0.4%という大変高い数値となり、縄文時代の0.1%とはかけ離れているだけでなく、弥生時代前半の渡来人によって増加したと考えられる0.2%という値の更に2倍となります。紀元3世紀の60万人という人口を、弥生時代と同じ0.2%という人口増加率を用いて奈良時代の人口を計算しても170万人にしかならず、280万人もの差が生じます。この数字は、北東アジアから毎年、移民が南

下して日本に渡ってきた、というような従来の通説では説明が付きません。弥生時代を通して急激な気候の変化や、天変地異があった訳でもなく、大陸における歴史を振り返ってみても、そこまでの膨大な数に上る人々が中国大陸や朝鮮半島から移動し、海を渡ってまで未だ見知らぬ日本列島に移住する理由が見あたらないのです。

この急激な人口増加は、紀元3世紀以降、日本列島に居住する縄文人と弥生時代に入ってから大陸より渡来したイスラエル系渡来人からなる「日本人」が、更なる変化を遂げることを意味します。つまり、民族大移動ともいえる新たな大きな人の波が日本に押し寄せてきたのです。

例えば毎年1000人単位で大陸から日本へ渡り、それが1000年続いたとして都合100万人。その渡来人の人口が、在来の人日本人と同様に年平均0.2%ずつ増加したと仮定しても、奈良時代の人口が300万人にも満たないのです。それ故、「100万人渡来説」を唱えても、まだ人口が不足し、実際には、その数字を更に上回る渡来人が訪れたことを想定する必要があるようです。

弥生時代における急激な人口増加は、アジア大陸より数万人単位でまとまって日本に渡ってきたというような前提で古代史を見直さない限り、説明が付きません。無論、歴史的背景を踏まえることは当然であり、古文書等に記載されている史実と照らし合わせることも重要です。紀元3世紀以降、8世紀までの間に生じた280万人もの人口のギャップを埋めるのが、イスラエルのユダ族をルーツに持つ秦氏を中心とする渡来人ではないのでしょうか。秦氏らと共に大勢の渡来人が朝鮮半島より日本に渡ってきたと想定することにより、これまでの謎が一気に解明できます。

例えば、応神天皇の即位を機に、秦氏らを中心とする渡来人

が紀元3世紀から、100年あたり50万人、300年で都合150万人が日本に移住したと仮定し、0.2%の平均人口増加率で計算した渡来人の数を加えると、8世紀奈良時代には450万人となり、当時の人口の推定とちょうど数が合います。このように推測していくと、奈良時代に至る直前の500年間に、100万人を大きく超える渡来人が日本を訪れ、日本文化の源流を築きあげたことに気が付きます。彼らは自ら日本人のルーツの一部となり、日本の文化を支えた立役者となったのです。

イスラエル系が占める比率は

弥生時代前半にイスラエルから渡ってきた者の中には、国家が崩壊した直後ということもあり、長旅を経て直接日本に移住してきた民が少なからずいたはずで、ユダ族とベニヤミン族、レビ族を中心とした南ユダ王国の民だけでなく、北イスラエル王国の民の中にも、祖国イスラエルの崩壊と共に、神を崇める新天地を目指して日の出方向へ旅立ち、「東の島々」に到達するという明確な夢と希望を持ち続けた民が、少なからずいたことでしょう。

その結果、移民の流れは絶えることなく続き、紀元3世紀までにその数は累積で20万人を超えるまでになりました。渡来人は、それまで人口の少なかった九州、山陰、四国など、西日本側を中心として、居住範囲を広めていったと考えられます。

無論、渡来人の中には使用人を始めとする、イスラエルに属さない人々も大勢いたと想定されます。例えば、弥生初期から紀元3世紀までに日本に渡ってきた渡来人の構成比率として、約3分の1が南ユダ王国の部族、約3分の1が北イスラエル王国の部族、そして残りの3分の1がその他の人種であると仮定してみました。すると紀元3世紀に60万人と推定された人口の内、少なくとも37万人が渡来人のルー

ツであることになり、そこにおよそ12万人の南ユダ王国の民と、更に12万人の北イスラエル王国の民が含まれていたと考えられます。1つの試算にしかすぎませんが、紀元3世紀の時点で、イスラエルにルーツを持つ民が、日本の全人口の4割前後を占めていたということになるのです。

弥生時代前半に渡来したイスラエルの民を原イスラエル人とするならば、紀元3世紀以降に中国から朝鮮半島経由で渡来した秦氏を中心とするイスラエル民族は、ユダヤ系の朝鮮・中国人と言えるかもしれません。なぜならば、どちらもイスラエルにルーツを持つ民族ではあるものの、紀元3世紀以降に日本に渡ってきた秦氏らは、渡来するまでの長い年月を大陸で過ごし、中国文化圏の影響を著しく受けてきただけでなく、その後は朝鮮半島に移住し、朝鮮語を含む文化に大きく感化されたと考えられるからです。また、混血という現実的な問題もあり、何世紀にもわたる異国での生活から、複合的な文化を携えたイスラエル系のアジア民族としての秦氏の姿が浮かび上がってくるのです。

つまるところ、秦氏とはイスラエルの民としてダビデ王朝を継ぐ血統のユダ族でありながらも、中国や朝鮮の血が混在したであろうと考えられることから、ユダヤ系朝鮮・中国人と呼ばれるにふさわしい存在であったと言えます。その秦氏は、紀元8世紀には、日本の全人口の1～2割は占めていた可能性があります。

こうして「日本人の起源」を考える際、日本人のルーツに、秦氏の血が脈々と流れていることに感動を覚えずにはられません。西アジアの卓越した文化と優れた伝統を継承し、イスラエル王に繋がる一族として、真なる神への信仰をかたくなに守り続けてきた偉大なる民であった秦氏によって、日本の歴史はその後、大きく動かされることになります。（文：中島尚彦）

創刊 100 号のお礼とお詫び

日頃、「成田シティージャーナル」をご愛読頂き、誠にありがとうございます。平成22年2月に創刊100号を迎えることができました。多くの読者の皆様からの暖かい声援に励まされたおかげであり、心から感謝いたします。

この度、3月16日に配布いたしました101号のメイン記事「古代史の散策を楽しむ PartVIII」の内容に間違いがございました。編集工程のエラーにより未校正部分が残ったまま、読者の皆様にお届けしてしまいました。ご迷惑をおかけしたこ

とを深くお詫びいたします。

つきましては、メイン記事を加筆・校正したものを、臨時増刊号として配布させていただきます。大変お手数をおかけいたしますが、本号を101号の1ページ目と差し替えて頂ければ幸いです。

今後、このようなエラーが発生しないよう、努めてまいりますので、今後とも「成田シティージャーナル」を宜しくお願い申し上げます。

成田シティージャーナル 代表 中島尚彦

「成田シティージャーナル」に関するご意見、ご感想、ご要望、バックナンバーご希望の方、その他なんでも、皆さんの声をお待ちしております。連絡は下記まで。
電話：0476-89-2333 電子メール：comment@naritacity.com

カリフォルニアで育まれた
おいしい天然水

1本当たり
23円
送料抜きの場合

検索

アクアヴィル

ご注文は、Web・携帯・お電話・FAXで！
全国にお届け致します

24本入(500mlボトル)
¥980 送料込み

株式会社 フィットネスハウス
www.fitnesshouse.co.jp/water FAX:0476-89-3112

0476-89-3111



WEBサイトがリニューアル！より読みやすくなりました。
<http://www.naritacity.com>

-2-